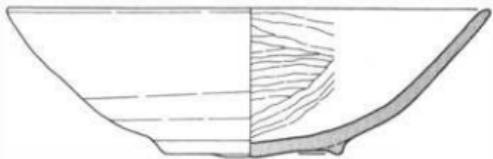


徳久中牟田遺跡

福岡県筑後市大字徳久所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第19集



1999

筑後市教育委員会

とくひさなかむた
徳久中牟田遺跡

福岡県筑後市大字徳久所在遺跡の調査

1999

筑後市教育委員会

序

本書は、平成8年度に調査を実施しましたスーパー店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

筑後市では、近年、大規模な圃場整備事業が行われ、埋蔵文化財調査が急増している所です。今回の調査は、徳久地区におきまして初めての調査であり、先人達の当時の様相を垣間見ることができましたが、具体的な内容につきましては、今後の調査に期待せざるを得ません。

本報告書が、学術研究や郷土研究として広く活用していただければ幸いです。この報告書の発行にあたり、御指導と御協力をいただきました関係者各位に、厚くお礼申し上げる次第です。

平成11年3月

筑後市教育委員会
教育長 車田口 和良

例 言

1. 本書は、スーパー店舗建設に伴い、株式会社福岡丸食からの委託を受け、筑後市教育委員会が実施した徳久中牟田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地点は福岡県筑後市大字徳久248外で、開発面積18,193m²のうち発掘調査面積は、6,800m²であった。調査期間は、平成8年4月18日から同年7月12日であった。
3. 発掘調査は、小林勇作、柴田剛が担当した。
4. 遺構の実測作成及び写真撮影は、上記担当者の他に、永田佳子、野田洋子、江崎貴浩、奥村太郎、高野奈緒美が行い、遺構の全体写真是（有）空中写真企画（代表 塙睦夫）に委託した。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第二座標系によっているため、本書に示す方位はすべて座標北（G.N.）である。
6. 遺物の実測作成及び記述は、平塚あけみ、柴田、拓本は、江藤玲子が行い、遺物の写真撮影は柴田が行った。なお、本文中に記載した遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
7. 遺構全体図で示した土層ポイントは、現場が冠水し、ポイントが崩落したため写真及び略図から復原した。
8. 本書に使用した遺構の表示は、下記の略号による。

SD—溝 SK—土壤 SX—落込み状遺構 不明遺構

9. 遺物実測で断面塗り潰しは須恵器、器面網伏せは黒色土器、断面網伏せは瓦器を示す。
10. 本書の執筆は、柴田が行い、小林、上村英士の協力を得て、編集を行った。
11. 本書に掲載した陶磁器分類は、大宰府条坊跡Ⅱ・太宰府市の文化財第7集・1983によっている。

目 次

1.はじめに	1
2.遺跡の位置と歴史的環境	2
3.調査の概要	7
(1)検出遺構	7
(2)出土遺物	11
4.おわりに	18
(1) SD10.SD20の埋没過程について	18
(2) SD10.SD20.SD30の関係について	19
(3) SD10について	19
(4) 瓦器窯について	19
(5) 小結	19

1. はじめに

株式会社福岡丸食は、筑後市内にスーパー店舗建設を計画し、予定地内の埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて、筑後市教育委員会に照会があった。筑後市教育委員会では、これを受け、現地の確認調査を実施することになった。

重機を使用した確認調査の結果、開発予定地内から溝や土礫などを確認したため、開発原団者と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね、開発面積18,193m²の内の6,800m²を発掘調査面積として実施することになった。調査は、平成8年4月18日から7月12日まで実施し、7月3日に遺構全体の空中写真撮影を行った。また、整理作業及び報告書作成は、筑後市教育委員会文化財整理室にて、随時行った。

発掘調査及び整理作業の関係者は次の通りである。

調査委託者 株式会社福岡丸食

調査体制

- (1) 調査主体 築後市教育委員会
(2) 総括 教育長 森田基之 (～H10.3) 卢田口和良 (H10.4.7～)
教育部長 津留忠義 (～H10.3) 下川雅晴 (H10.4～)
社会教育課長 山口逸郎
社会教育係長 本村正晴 (～H9.3) 田中清通 (H9.4～)
社会教育係 永見秀徳 小林勇作 (調査担当)
(文化財担当) 田中 刚 上村英士 (H9.6.1～)
(嘱託) 柴田 剛 (調査担当) 上村英士 (～H9.5.30)
立石真二 (H9.8.1～)

(3) 発掘調査参加者 (順不同、敬称略)

(調査補助員) 永田 佳子 (～H8.6) 野田 洋子 (～H9.3)

(調査作業員) 江崎 實浩 浅山 順子 池末 桂子 井上 正治 井上むつ子 牛島 蓉子
江崎トシ子 太田黒三枝 大塚 政夫 小野カトリ 小野 清次 小野ミノブ 桃島美恵子
北島 清 土井八重子 北原 光子 古賀 明美 古賀 妙子 近藤ヨシ子 近藤 都
鶴芳輝 高山加代子 壇 ちゑこ 堤 奈留美 城崎マヨヨ 徳永 正士 西村 光子
馬場 孝司 浜田たみこ 東 未子 平井 正芳 村上美津子 室園 京子 森山美津子
吉間 朝子 富安 英子 愛川 一枝 江崎 末廣 加藤 札子 蒲池 京子 角里 子
田島 好江 平井 良治 矢次 和枝 吉 田 裕 渡辺 茂喜 平尾 仁子 深町 順子
深町スミ子 村上 幸子 深町美智子 渡辺 泰子 山浦トキヨ 吉田喜美子

(4) 整理作業員 (順不同、敬称略)

平塚あけみ (整理補助員) 江藤 玲子 (整理補助員 H10.4～) 野間口靖子 馬場 敦子
湊 まど香 (～H10.3) 野口 晴香 (H10.5～) 湯川 琴美 (H10.5～)

なお、発掘調査及び整理にあたっては、以下の方々に御教示、御指導を頂き、調査を終える事ができた。記して感謝の意を表す。

新原正典 (九州歴史資料館) 小田和利 (福岡県教育庁南教育事務所) 山本信夫、荻川真一、中島恒次郎、山村信榮、井上信正、城戸康利、高橋学、宮崎亮一 (太宰府市教育委員会) 山田元樹、坂井義哉 (大牟田市教育委員会) 大塚忠治 (八女市教育委員会) 綱田龍生 (熊本市教育委員会) 白木守、富永直樹 (久留米市教育委員会) 小鹿野亮 (筑紫野市教育委員会) 尾崎源太郎 (広川町教育委員会) 宮田浩之 (小郡市教育委員会) 徳永貞紹 (佐賀県三日月町教育委員会) 塩地潤一 (大分市教育委員会)

2. 遺跡の位置と歴史的環境

徳久中牟田遺跡は、福岡県筑後市大字徳久248外に所在する。

筑後市は、福岡県の南西部、筑後平野のはば中央に位置し、市の北は久留米市、三嘉町、南は瀬高町、東は八女市、西は大木町に隣接している。JR鹿児島本線と国道209号が市の中央を南北に貫き、国道442号は東西に横断する。市内には一級河川の矢部川や水田の灌漑用水として整備された人工河川の山ノ井川、花宗川が西流する。

今回報告する徳久中牟田遺跡は、市の中央付近に位置し九州縱貫自動車道八女インターチェンジの西に位置し、標高約14.5mの低位段丘上に立地する。なお、「徳久」の地名は、鎌倉時代の広川荘得久名にちなむ地名由来がある。

継いて、市内の主な遺跡を時代を追って概観する。

市内から発見された旧石器は、坂口遺跡から出土した角錐状石器のみである。縄文時代の遺跡は、学史的に有名な早期の押型文土器が多く出土した裏山遺跡や、落し穴遺構を検出した長浜館遺跡、久恵中野遺跡などがあげられる。弥生時代の遺跡は、数多くの堅穴住居を検出した藏敷森ノ木遺跡（弥生中期～古墳後期）、狐塚遺跡（弥生終末～古墳初頭）や、甕棺を検出した藏敷東野屋敷遺跡などが市内の全域に分布する。古墳時代になると八女丘陵一帯に古墳が点在し、国指定史跡の石人山古墳（広川町、筑後市）や岩戸山古墳（八女市）があげられる。市内には、市指定文化財である前方後円墳の欠塚古墳や珠文鏡が出土した円墳の瑞王寺古墳（消滅）が所在し、集落遺跡では、堅穴住居を検出した田佛遺跡があげられる。奈良時代の集落遺跡は、500軒以上の堅穴住居を検出した若菜森坊遺跡や前津中ノ玉遺跡（前半～中頃）などがあり、平成9年度に実施した前津中ノ玉遺跡2次調査では、更に集落が広がることが確認された。また、鶴田市ノ塚遺跡から古代の官道である「西海道」が確認され市のほぼ中央を横断することが推定される。中世では、居館跡とされる長崎坊田遺跡や櫻崎遺跡があり、近世では、四ヶ所古四ヶ所遺跡が確認されている。

（参考文献）

筑後市文化財調査報告書	筑後市教育委員会	「奥山遺跡」		1966
筑後市文化財調査報告書	筑後市教育委員会	「瑞王寺古墳」	第3集	1984
筑後市文化財調査報告書	筑後市教育委員会	「前津中の玉遺跡」	第4集	1987
筑後市文化財調査報告書	筑後市教育委員会	「田佛遺跡」	第5集	1988
筑後市文化財調査報告書	筑後市教育委員会	「藏敷遺跡群」	第6集	1990
筑後市文化財調査報告書	筑後市教育委員会	「欠塚古墳」	第8集	1993
筑後市文化財調査報告書	筑後市教育委員会	「櫻崎遺跡」	第9集	1993
筑後市文化財調査報告書	筑後市教育委員会	「四ヶ所古四ヶ所遺跡」	第10集	1994
筑後市史第3巻				1997



Fig.1 遺跡分布図 (1/25000)

- | | | | |
|-------------|---------------|-------------|-------------|
| 1. 德久中牟田遺跡 | 2. 蔵敷森ノ木遺跡 | 3. 蔵敷東野屋敷遺跡 | 4. 長原山遺跡 |
| 5. 蔵敷赤坂遺跡 | 6. 壁の谷遺跡 | 7. 石人山古墳 | 8. 弘化谷古墳 |
| 9. 欠塚古墳 | 10. 久富大門口遺跡 | 11. 久富斗代遺跡 | 12. 前津中ノ玉遺跡 |
| 13. 羽大塚中道遺跡 | 14. 羽大塚射場ノ木遺跡 | 15. 羽大塚町囲 | 16. 若菜森坊遺跡 |
| 17. 長浜鏡遺跡 | 18. 井原口遺跡 | 19. 狐塚遺跡 | 20. 鶴田東大坪遺跡 |
| 21. 西中ノ沢遺跡 | 22. 坊野遺跡 | 23. 野口遺跡 | 24. 道添遺跡 |

(1~20 築後市) (21~24 八女市)

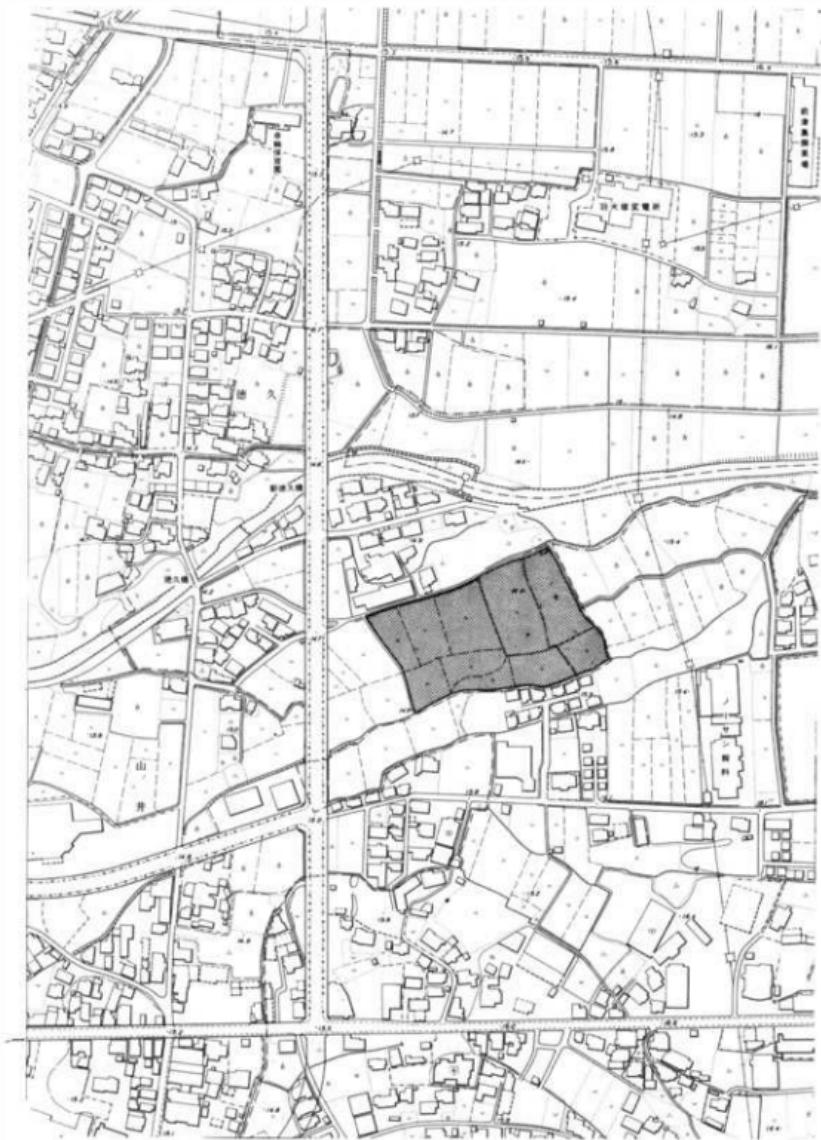


Fig.2 調査地点位置図 (1/5000)

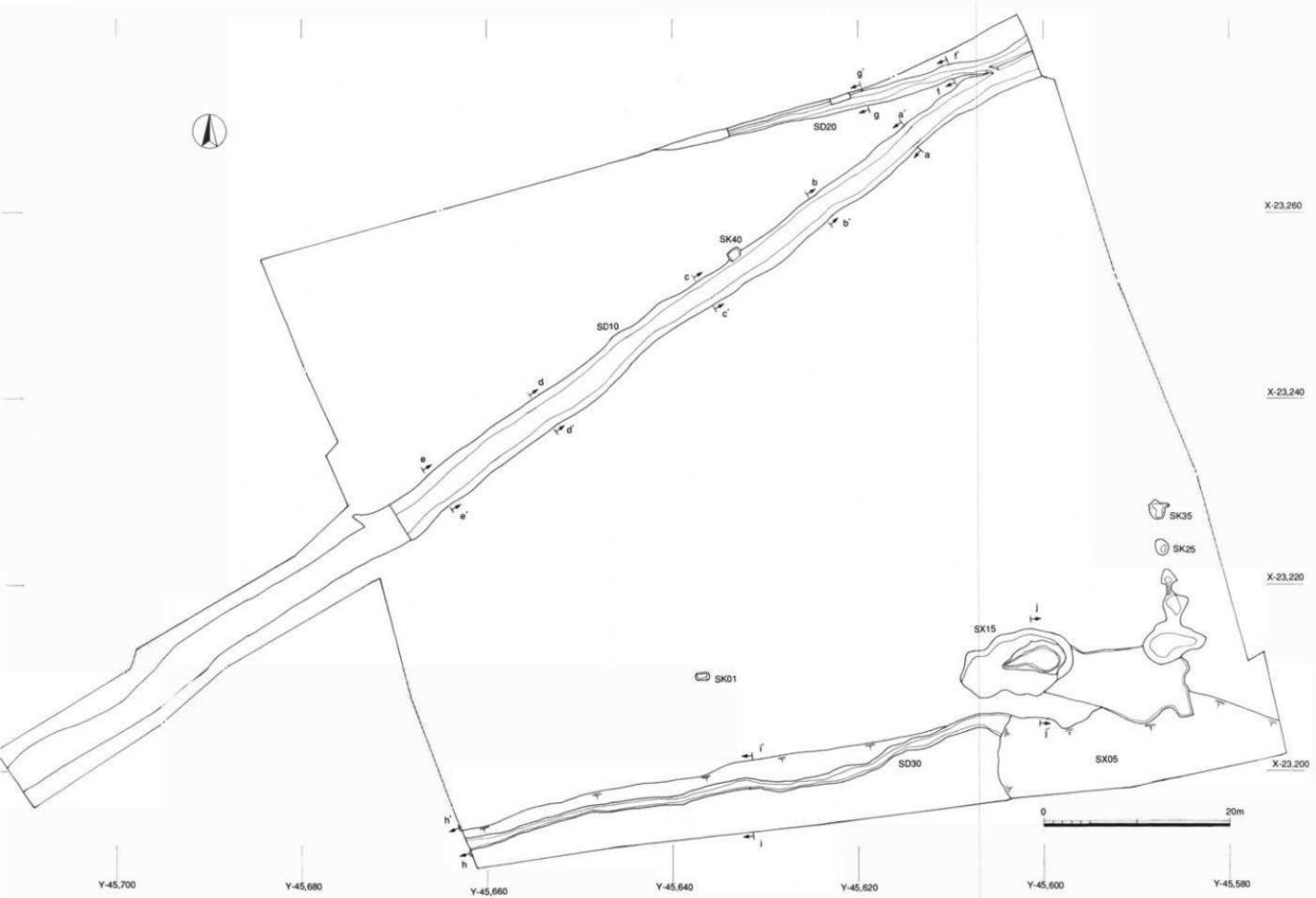


Fig.3 徳久中牟田遺跡遺構全体図 (1/400)

3. 調査の概要

(1) 検出遺構

当遺跡は、標高14.5mの低位段丘上に位置し、東は緩やかに段上し、南は傾斜する。調査の結果、0.20m～0.50m程度の表土を除去すると、遺構面である黄褐色粘土の地山が現れる。

以下、検出した遺構や出土遺物について報告する。

なお、検出遺構は、たび重なる冠水のため崩落を繰り返したことにより、上場の線は、完掘の図面とは異なる。そのため、幅、深さは土層断面図からの数値である。

1. 溝

SD10 (Fig.4~8)

調査区の北東部隅から調査区外の南西にかけて検出した。溝は、検出長約135mを測り、そのうち約85m（調査区内）を完掘した。溝の幅は、2.50m～3.85m、深さ0.78m～0.90mで、断面は逆台形を呈している。溝の底面には、河原石（5～20cm位）や砂を認め、流れによって壁がえぐられている部分も確認した。また、土層観察の結果、掘り直しがあったと考えられ、出土遺物については、瓦器椀、黒色土器椀A類、土師器壺、椀、小皿系切り、土鍋、高杯、須恵器甕、壺、同安窯系青磁碗I-3、III-I-2c、龍泉窯系青磁碗I-1b、白磁IV類が出土した。厳密な層位的取り上げではないのでやや不安が残るが、最終埋没は、12世紀後半～13世紀前半と考えられる。特に瓦器椀の個体数が目立った。

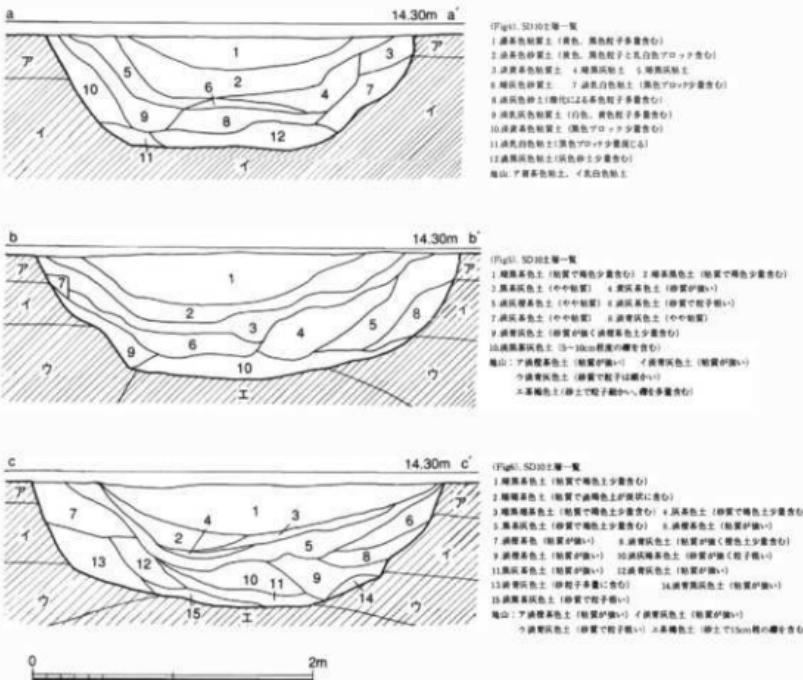


Fig.4-6 SD10土層断面実測図 (1/40)

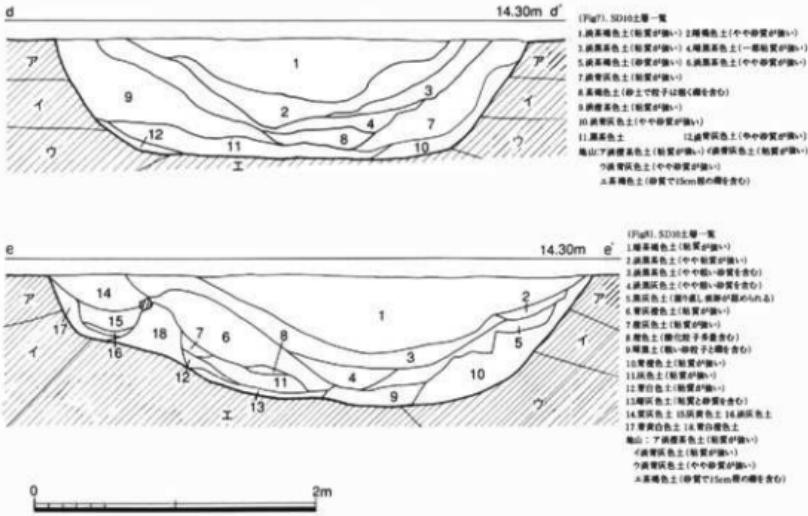


Fig.7・8 SD10土層断面実測図 (1/40)

S D 20 (Fig. 9.10)

調査区の北東隅から西に延びる溝で、SD10が切っていると思われる。溝は、検出長約41.5m、幅1.30m～1.40m、深さ0.58m～0.66mで逆台形を呈す。土層観察の結果、掘削痕跡が認められ、掘り直しがあったと考えられる。出土遺物については、上層から黒色土器楕A類1点が出土した。中層、下層には土器の出土が皆無のため時期は不明である。最終埋没は、9世紀後半～10世紀前半頃と考える。

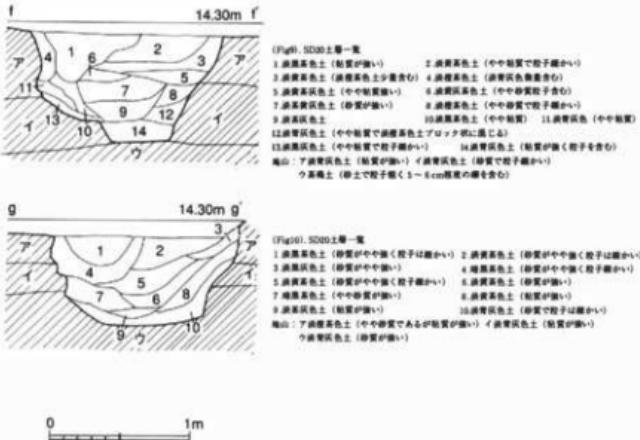


Fig.9・10 SD20土層断面実測図 (1/40)

S D30 (Fig. 11)

調査区の南に位置する東西に延びる溝で、暗黒灰粘土のS X05を切る。溝は、やや蛇行しながら約58.0mを測り、幅0.85m、深さ0.24mで、断面は逆台形状を呈す。出土遺物については土器器片を認めたが、磨滅が著しく時期決定は困難である。

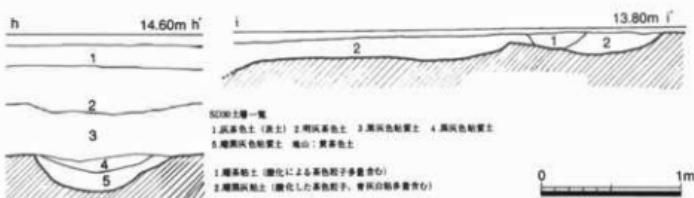


Fig.11 SD30土層断面実測図 (1/40)

2. 土壙

S K01 (Fig. 12)

調査区南西に位置し、長軸1.39m、短軸0.81m、深さ0.50mを測る長方形プランである。埋土は、暗黄粘質土の堆積を示す。また、ロームブロックを斑状に多量含んだ状況を示し、断面は逆台形状を呈す。遺物については土器器片を認めたが、磨滅が著しく時期決定は困難である。土壙主軸は、N—0°—Eである。

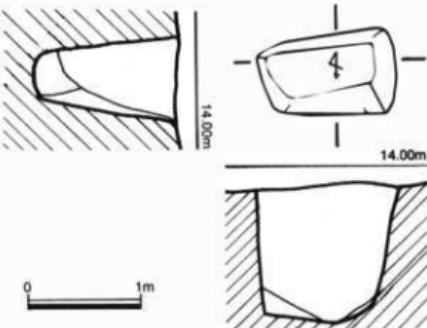


Fig.12 SK01実測図 (1/50)

S K25 (Fig. 13)

調査区南東に位置し、長軸1.40m、短軸1.30m、深さ0.25mを測る楕円形のプランである。埋土は、灰色粘土の堆積を示す。断面は、逆台形状を呈す。出土遺物については、皆無なため時期決定は出来ないが、周辺の遺構の埋土状況などを考え合わせると中世の遺構ではないかと思われる。ここでは、土壙として報告する。土壙主軸はN—0°—Eである。

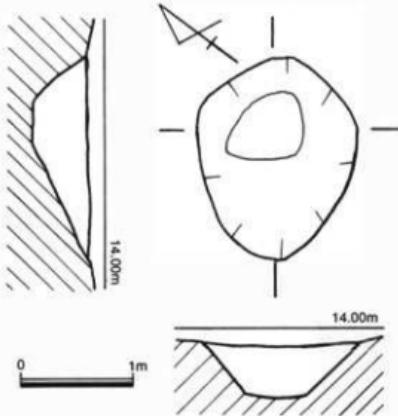


Fig.13 SK25実測図 (1/50)

S K 35 (Fig. 14)

調査区南東に位置し、長軸2.20m、短軸1.50m、深さ0.24mを測る不整形プランである。断面はゆるやかな逆台形状を呈す。埋土は、灰色粘土の堆積を示す。周辺の遺構の埋土状況などを考え合わせると中世の遺構ではないかと思われる。出土遺物については、安山岩のサスカイト製石器で右脚端部を欠損しているが、ほぼ完形である。その他に土師器片を認めた。土壤主軸はN-68°-Eである。

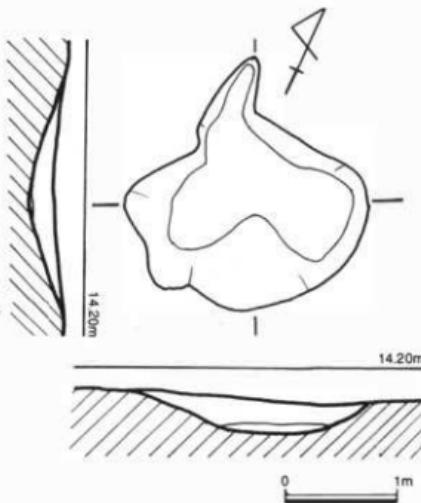


Fig.14 SK35実測図 (1/50)

S K 40 (Fig. 15)

調査区北に位置し、SD10を切る。長軸1.38m、短軸1.10m、深さ0.34mを測る長方形プランである。断面逆台形を呈す。埋土は、灰褐粘質土の堆積を示す。出土遺物については皆無なため時期決定は出来ないが、周辺の埋土状況などを考え合わせると中世の遺構ではないかと思われる。ここでは土壤として報告する。土壤主軸はN-9°-Eである。

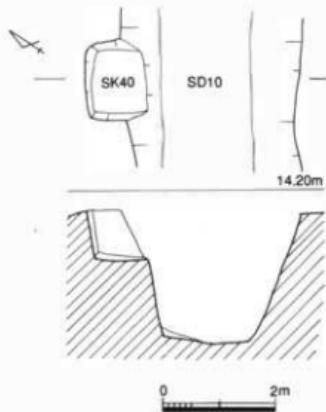


Fig.15 SD10・SK40実測図 (1/100)

3. その他の遺構

S X05 (Fig. 3)

S D30の途切れたところから始まる落込み状遺構で調査区南東隅に位置する。埋土は、暗黒粘土の堆積を示す。出土遺物については、弥生土器片、土師器片、瓦器碗、黒曜石製の石器を認めた。

S X15 (Fig. 16,17)

調査区南東に位置し、検出時は横広い不整形なプランであった。そのため中央に土層ベルトを残し左を西端、右を東端として遺物を取り上げた。包含層（暗褐色土）を除去した所でプラン確認した。長軸12.38m、短軸7.10m、深さ1.25mを測る楕円形プランを呈す。埋土は9層に分かれ、1~4層に遺物が認められた。S X15東端の出土遺物については、弥生土器片、須恵器甕、壺、土師器土鍋、白磁片、龍泉窯系青磁、黒色土器A・B類、瓦器碗を認めた。

また、S X15西端の出土遺物について瓦質土器擂鉢、龍泉窯系青磁を認めた。最終埋没は、14~15世紀頃と考える。下層から遺物の出土はなかったが、素堀りの井戸の可能性も考えられる。主軸はN-72°-Eである。

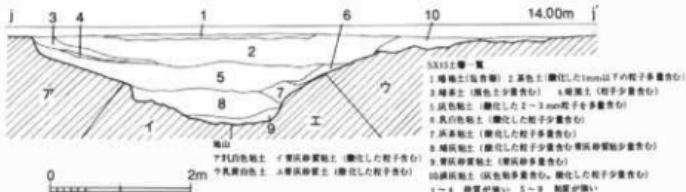


Fig. 16 SX15土層断面実測図 (1/80)

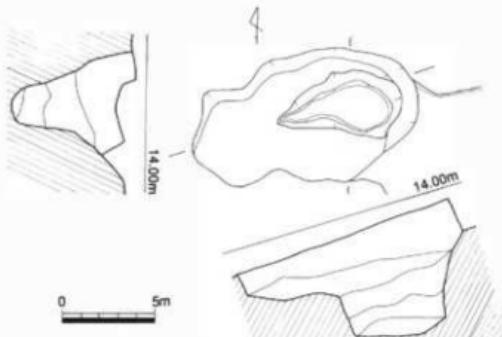


Fig. 17 SX15実測図 (1/300)

(2) 出土遺物

今回報告する出土遺物については厳選された遺物である。また、S D10から瓦器碗と思われる細片が多数あるが、実測不可能であるため図示していない。

S D10上層 (Fig. 18,19)

土師器

小皿 (1) 口径9.4cm、器高1.3cm、底径7.1cmを測る。口縁部は丸く体部下位に丸味をもつ。調整は横ナデ、白色砂粒少量含む。内外面、乳白色を呈す。底部は糸切りで板状圧痕が残る。

小皿 (2) 口径9.2cm、器高1.1cm、底径7.6cmを測る。口縁部は丸く体部下位に丸味をもち、白色砂粒を微量含む。内外面、橙乳白色を呈す。磨滅が著しいため調整不明であるが、底部は糸切りで板状圧痕が残る。

小皿（3）復原口径8.8cm、器高1.1cm、底径6.5cmを測る。口縁部は丸く調整は横ナデで白色砂粒を微量含む。内外面、乳白色を呈す。底部は、糸切りである。

小皿（4）復原口径8.8cm、器高0.9cm、底径7.8cmを測る。口縁部は丸く磨滅が著しいため調整不明であるが、底部は糸切りである。内面は淡灰色、外面は灰色を呈す。焼成は良好である。

坏（5）復原口径15.6cm、器高3.4cm、底径10.6cmを測る。磨滅が著しいため調整不明であるが、底部は糸切りと考えられる。内外面、淡橙色を呈す。

土鍋（6）口縁部は、粘土帯を貼り付けた玉縁状の口縁で、内面は斜め方向の刷毛目調整が残る。内外面、乳橙色を呈し、白色砂粒多量含む。

壺（11）復原底径13.9cmを測る。外面は、還元焼成により淡灰色を呈し、胎土は、精選され焼成は良好である。平安前期の所産であろう。

甕（12）口縁部の一部であるが磨滅が著しいため調整は不明である。内外面、淡橙色を呈し、白色砂粒と雲母を含む。

高坏（13）脚部の一部であるが、磨滅が著しいため調整は不明である。内外面、淡橙色を呈し、白色砂粒少量含む。古墳時代の所産であろう。

椀（14）磨滅が著しいため調整は不明であるが、内面は黒色を施すが高台までは及ばない。黒色土器A類。

椀（15）磨滅が著しいため調整は不明であるが、内面は黒色を施すが高台までは及ばない。高く細長い高台を貼付する。黒色土器A類。

須恵器

甕（7）外面正格子叩き、内面平行叩きである。内面は淡灰色、外面は灰色を呈し、黑色砂粒を微量含む。焼成は良好である。

甕（8）外面平行叩きで格子も部分的に認められる。内面は、平行叩きである。内外面、灰色を呈し、焼成は良好である。

甕（9）外面正格子叩き、内面は、平行叩きである。内外面、乳白色を呈し、白色砂粒、雲母を少量含む。

壺（10）頸部の破片で外面平行叩き、内面は、同心円形の当て具痕が残る。内面は暗灰色、外面は灰色を呈し、黑色砂粒微量含む。焼成良好である。

陶磁器

白磁

碗（16）復原口径17.6cmを測る。釉は、淡い空色を帯びた透明釉が施される。IV類。

碗（17）やや緑がかった光沢のある透明釉が施される。IV類。

龍泉窯系青磁

碗（18）外面無文、内面はヘラまたは櫛状のもので花文様を施されている。釉は、灰緑色を施す。I-3類。

皿（20）体部中位で屈曲し、口縁部は薄く引き出されたものである。釉は、やや明い緑色を呈し、見込みに櫛による花文を有するが、その中に放射状の櫛目が入っている。底部の釉は、施釉されたのちカキ取る。I-2c類。

同安窯系青磁

碗（19）外面の放射状の櫛目を有し、内面に櫛歯文が描かれる。釉は、光沢のある透明釉である。I-1b類。

瓦器

碗（21）磨滅が著しいため調整不明であるが、高台部分は貼り付けのため回転ナデである。底径6.6cmを測る。内外面暗黒色を呈し、白色粒子少量含む。高台は断面逆台形状を呈し低い。

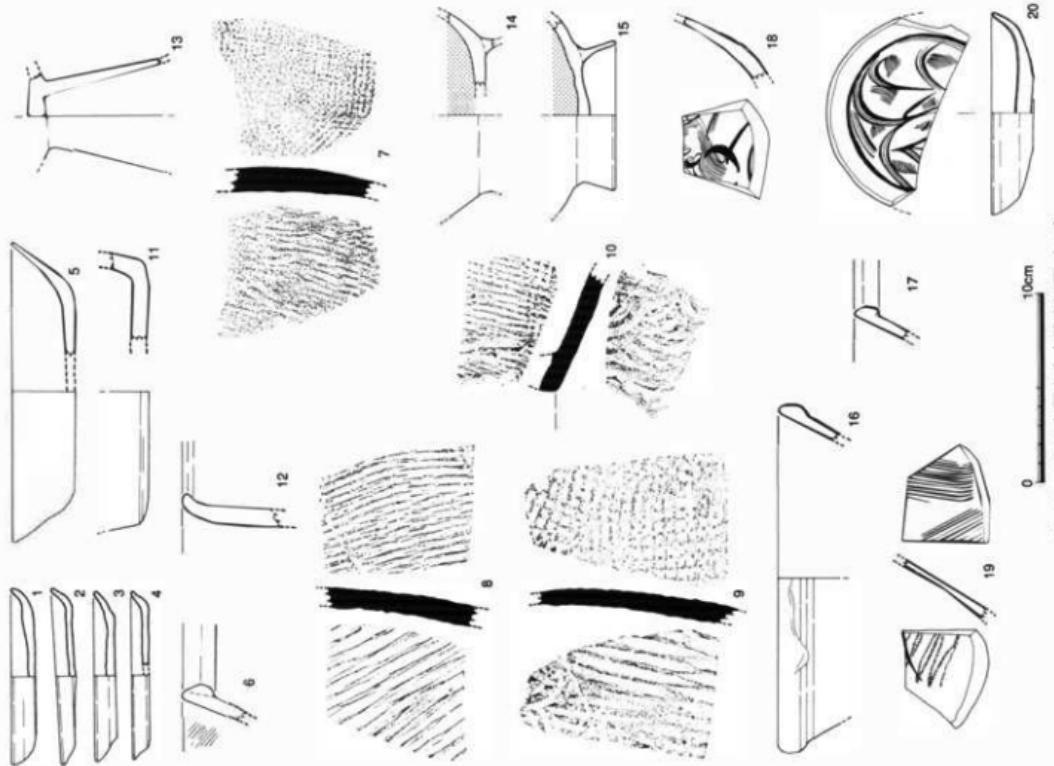


Fig.18 SD10上層出土土器実測図 (1/3)

碗 (22) 磨滅が著しいため調整不明であるが、高台部分は貼り付けのため回転ナナデである。底
径6.4cmを測る。内外面、灰白色を呈す。高台は断面逆三角形状を呈し低い。

碗 (23) 磨滅が著しいため調整不明であるが、高台部分は貼り付けのための回転ナナデである。
内面は、縫制が見られる。底径6.6cmを測る。内面は淡灰色、外側は灰褐色を呈し、白色砂粒を少
量含む。

碗 (24) 磨滅が著しいため調整不明であるが、高台部分は貼り付けのための回転ナナデである。

底径7.0cmを測る。内外面、淡灰色を呈す。高台は断面逆台形状を呈し、低い。

椀 (25) 磨減が著しいため調整不明であるが、体部外面は糸切り、高台部分は、貼付けのための回転ナデと思われる。底径6.0cmを測る。内面は暗黒色、外面は淡灰色を呈し、白色砂粒を少量含む。高台は断面逆三角形状を呈し、低い。

椀 (26) 磨減が著しいため調整不明であるが、高台部分は貼り付けのための回転ナデである底径7.5cmを測る。内外面、灰色を呈す。高台は断面逆三角形状を呈し、低い。

椀 (27) 復原口径17.2cm、器高5.4cm、底径6.0cmを測る。磨減が著しいため調整不明であるが、口縁端部回転ナデ、高台部分は、貼り付けのための回転ナデである。内外面重ね焼き痕跡が見られる。内面は暗灰色、外面は淡灰色を呈し、白色砂粒を微量含む。体部は丸みを帯びながら立ち上がり口縁部は肥厚する。高台は断面逆三角形状を呈し、低い。

椀 (28) 復原口径17.2cm、器高5.1cm、底径5.5cmを測る。磨減が著しいため調整不明であるが、口縁端部横ナデである。外面重ね焼き痕跡が見られる。内面は淡灰色、外面は灰白色を呈す。体部は丸みを帯びながら立ち上がり口縁端部は丸くなる。高台は逆台形状を呈し、低い。

椀 (29) 復原口径16.0cm、器高6.0cm、底径6.0cmを測る。磨減が著しいため調整不明であるが、高台部分は、貼り付けのための回転ナデである。内外面重ね焼き痕跡が見られる。内面は淡灰色、外面は淡灰白色を呈す。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。高台は逆台形状を呈し、低い。

椀 (30) 復原口径16.0cm、器高6.0cm、底径7.2cmを測る。磨減が著しいため調整不明であるが、外面体部下半糸切り、高台部分は貼り付けのための回転ナデ、底部は糸切りである。内外面重ね焼き痕跡とコテ当て痕が見られる。内外面、淡灰色を呈し、白色砂粒を微量含む。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。高台はやや開き気味で安定感があり、低い。

椀 (31) 復原口径15.3cm、器高5.5cm、底径6.6cmを測る。高台部分は、貼り付けのための回転ナデである。内外面重ね焼き痕跡が見られる。内外面、淡灰色を呈す。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。高台はやや開き気味で安定感があり、低い。

椀 (32) 復原口径16.5cm、器高5.4cm、底径6.4cmを測る。体部外面糸切りで、内面はコテ当て痕が見られる。外面は、高台内にx字状の線刻がある。内外面重ね焼き痕跡が見られる。内外面、灰色を呈す。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。高台は断面逆台形状を呈し、低い。

椀 (36) 口径17.2cm、器高5.3cm、底径6.3cmを測る。内面は、ミガキが施されている。内外面重ね焼き痕跡が見られる。内面は淡灰色、外面は暗灰色を呈し、白色砂粒を微量含む。体部はやや外反気味に立ち上がる。高台は逆三角形状を呈し、低い。

S D10東端上層 (Fig. 19)

瓦器

椀 (39) 口径17.2cm、器高5.5cm、底径6.8cmを測る。体部外面糸切りで、内外面ミガキを施すがやや粗い。内外面重ね焼き痕跡が見られる。内面は暗黒色、外面は淡灰色を呈し、白色砂粒微量含む。体部は丸みを帯び、口縁部は直立気味に立ち上がる。高台は低い。

椀 (40) 復原口径18.0cm、器高5.7cm、底径6.2cmを測る。外面ミガキを施し、高台内にx状状の線刻がある。内外面重ね焼き痕跡見られる。内外面、灰色を呈し、白色砂粒微量含む。体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁端部は肥厚する。高台は逆台形状を呈し低い。

S D10中層 (Fig. 20)

土師器

小皿 (33) 復原口径9.4cm、器高1.3cm、底径7.0cmを測る。口縁部は丸く体部下位に段が見られる。磨減が著しいため調整は不明であるが、底部は糸切りと思われる。内外面、淡褐色を呈し、白色砂粒を微量含む。

瓦器

椀 (34) 内外面ミガキを施す。高台疊付に板當てによる痕跡が見られる。底径6.4cmを測る。内面は灰色、外面は暗灰色を呈し、高台は安定感があり低い。

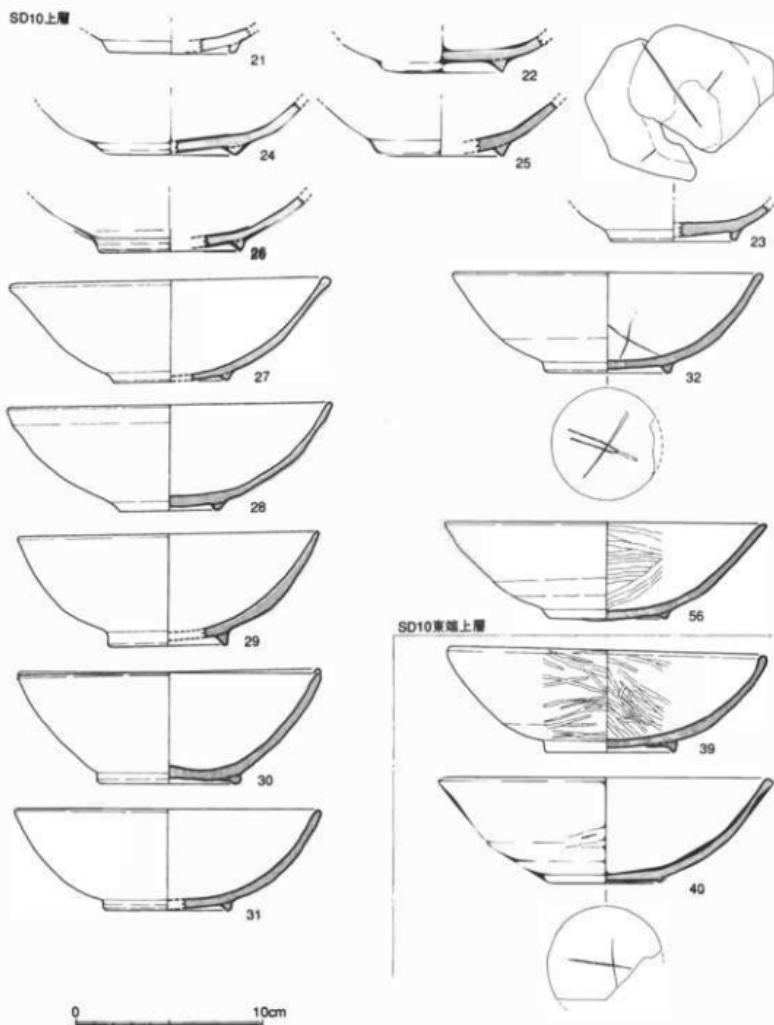


Fig.19 SD10上層・東端上層出土土器実測図 (1/3)

陶器

白磁

碗 (35) 内定部に片切り彫りの文様、見込みに沈線が見られる。釉は、緑かかった透明釉で高台まで及ばない。IV類。

S D10下層 (Fig. 20)

土師器

小皿 (36) 磨滅が著しいため調整不明。内外面は淡橙色を呈し、白色砂粒を微量含む。復原底径7.1cmを測る。

椀 (37) 磨滅が著しいため調整不明。内面は黄橙色、外面は橙色を呈す。平安時代の所産であろう。

須恵器

壺 (38) 外面正格子叩き、内面平行叩きである。内外面、乳白色を呈し、白色砂粒を微量含む。

S D20上層 (Fig. 20)

土師器

椀 (41) 復原口径14.0cm、器高7.0cm、底径8.1cmを測る。内外面ミガキと思われるが、磨滅が著しいため調整不明である。内外面は黒色を施すが高台までは及ばない。体部は丸みを帯ながら立ち上がり、口縁端部でやや外反する。高台は細くて高く、金觸器を模倣した黒色土器A類。

S X05 (Fig. 20.21)

瓦器

椀 (43) 復原口径16.6cm、器高5.0cm、底径6.9cmを測る。磨滅のため調整不明であるが、高台部は、貼り付けのための回転ナデである。内外面重ね焼き痕跡が見られる。内面は、黒色、外面は淡灰色を呈し、白色砂粒を微量含む。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。高台は低い。

石器

石鎌 (44) 黒曜石製の石鎌で抉りは浅く、両面ともやや粗く加工を施されている。現長2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.5gを測る。

S X15東端 (Fig. 20)

土師器

土鍋 (45) 口縁部の破片で端部は、折り返しによって玉縁状につくる。外面の一部に煤が付着する。内面は淡茶色、外面は淡黒色を呈し、砂粒を多量に含む。

須恵器

壺 (46) 復原底径8.0cmを測る。高台部分は、貼り付けのためのナデと思われる。内外面、灰色を呈す。焼成は良好である。

壺 (47) 外面平行叩きで、一部正格子叩も認められ、内面平行叩きである。内外面、赤色を呈し、白色砂粒を微量含む。焼成良好である。

壺 (48) 外面正格子叩き、内面平行叩きである。内外面、乳白色を呈す。

瓦質土器

擂鉢 (49) 内面刷毛を施した後櫛目を入れている。内外面、黒色を呈す。焼成は良好である。

S X15西端 (Fig. 20)

土師器

土鍋 (50) 口縁部の破片で、端部は折り返しによって玉縁状をつくる。外面には煤が全面に付着する。内面は淡茶色、外面は黒茶色を呈し、白色砂粒を微量含む。焼成は良好である。

土鍋 (51) 口縁部の破片で、端部は折り返しによって玉縁状をつくる。内面斜め方向の刷毛を施し、外面も刷毛目を施す。内外面、淡橙色を呈し、砂粒を微量含む。

擂鉢 (52) 口縁端部は厚いばち形を呈し、内面は刷毛目を施す。内外面、淡灰色を呈す。

陶磁器

龍泉窯系青磁

碗 (53) 内外面とも無文で口縁部は外反する。釉は青緑色で光沢がある。I-1類。

碗 (54) 復原口径16.4cmを測る。口縁部は、強く外反し、釉は薄くかけられている。I-1類。

S K35 (Fig. 21)

石器

石鏡 (42) 安山岩のサスカイト製で右脚端部を欠損する。現存長1.6cm、幅1.1cm、厚さ0.45cm、重さ0.7gを測る。

表採 (Fig. 20)

須恵器

壺 (55) 復原底径9.6cmを測る。底部回転ヘラ削り、内面横ナデである。内外面、灰色を呈す。焼成は良好である。

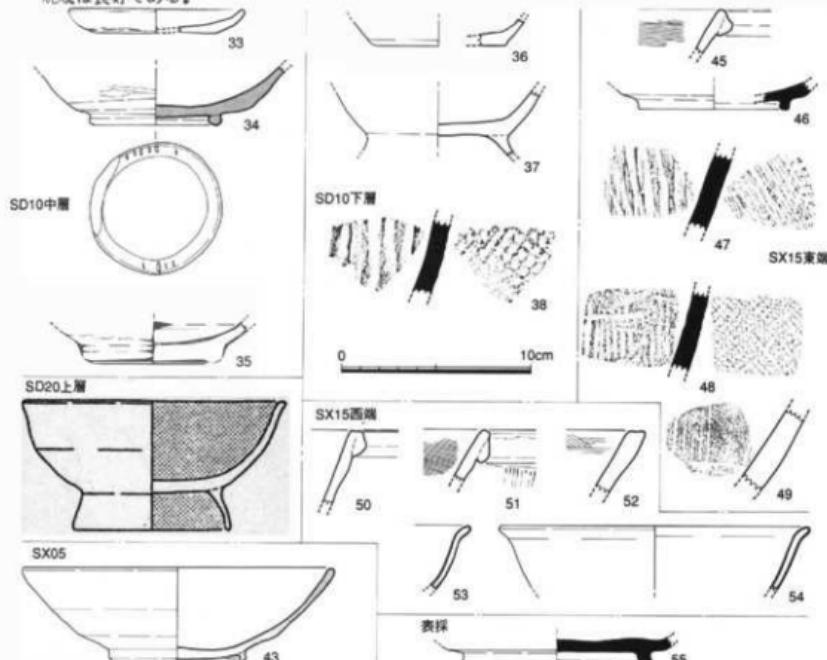


Fig.20 SD10中層・下層・SX15東端・西端・表土採集出土土器実測図 (1/3)



Fig.21 S X05・S K35石製品実測図 (1/2)

4. おわりに

(1) SD10, SD20の埋没過程について (Fig. 22)

今回の調査で検出したSD10, SD20は、4回の掘り直しがあったと考える。

ア) SD10について

(上層) 4段階は、断面逆台形状又はレンズ状を呈し直線状に立ち上がる。

(中層) 3段階は、断面逆台形状を呈し立ち上がりに段を認める。

(中層) 2段階は、断面逆台形状を呈し立ち上がりに段を認める部分と、緩やかに立ち上がる部分を認める。

(下層) 1段階は、断面逆台形を呈し立ち上がる。

遺物は、上層、中層、下層として取りあげを行った結果、上層は、12世紀後半～13世紀前半にかけて埋没したと考える。また、中層と下層の遺物に時期差は見られないため12世紀後半～13世紀前半に位置づけるのが妥当と考える。その結果、上層、中層、下層は、時間差もなく溝は短期間に何度も掘り直したと考える。

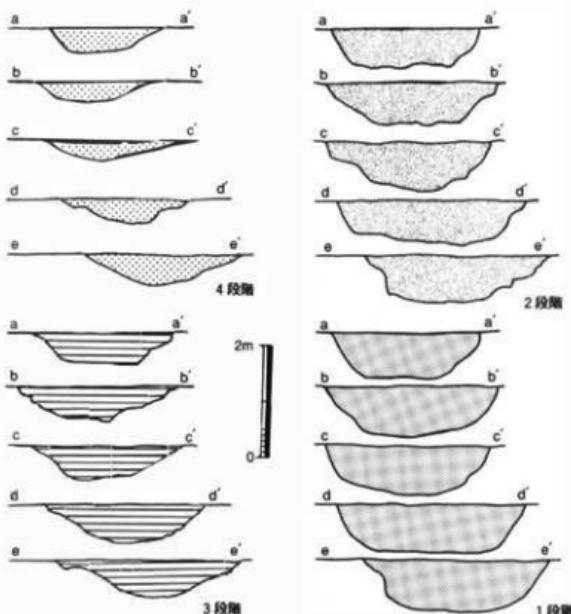


Fig.22 SD10埋没過程図 (1/100)

イ) SD20について (Fig. 23)

(上層) 4段階は、断面緩やかな逆台形状を呈し立ち上がる。

(中層) 3段階は、断面逆台形状を呈し立ち上がりにやや段を認めると、直線状に立ち上がる部分を認める。

(中層) 2段階は、断面逆台形状を呈し立ち上がり直線的な部分と段を認める部分もある。

(下層) 1段階は、断面逆台形状を呈す部分と、緩やかな立ち上がりで段を認める部分もある。

遺物は、上層から黒色土器A類が1点出土したのみである。

最終埋没は、9世紀後半～10世紀前半にかけて埋没したと考える。



Fig.23 SD20埋没過程図 (1/100)

(2) S D 10. S D 20. S D 30 の関係について

遺物の時期から判断すると、まず S D 20 が先行して掘られ埋没後、又は埋没中に S D 10 が掘られる。そのため S D 10 から古い時期の遺物が混入したと思われる。S D 30 からは、土師器片が出土しているが磨滅が著しいため時期決定は困難であるため、S D 10. S D 30 との前後関係はわからない。

(3) S D 10 について

調査区で検出した S D 10 を北東に延長させると人工河川の山ノ井川に合流し、南西に延長させると人工河川の花宗川に合流する。筑後市史第一巻によると、八女市から筑後市に広がる扇状地性低地は、矢部川の河床より高いため、水田の灌漑用水が取水出来ない。また、筑後市西部から西の三角州性低地は、水田の適地ではあるが筑後川、矢部川の後背湿地であるため排水路と灌漑水路の整備が不可欠であり、また扇状地性地形の八女市から筑後市にかけての地域は、河川増水や洪水の際側方侵食力（河岸を削る力）によって、分流あるいは乱流状態になった河川があったと推定されると言われている。発掘調査の結果、S D 10 の土層観察から掘削痕跡が確認されている点や、溝はほぼ直線的に伸びている点などを考え合わせると下層は、人工河川又は灌漑水路と考える。また、上層、中層についても溝の幅を縮小させながら人工河川又は灌漑水路として機能していたと考える。

(4) 瓦器碗について

今回の調査では、S D 10 から瓦器碗の個体数が目立った。磨滅が著しいため調整不明な点が多いが、体部外面糸切り、内面ミガキを施し、底部押し出し技法、内面コテ当て調整の技法の特徴などから「筑紫型」「筑前型」に分類出来ると思われる。また、高台の断面形態で時期差があると思われるが、それが時期差なのか、この地域の特徴なのか、筑後市内の出土例も少なく今後の課題としたい。

(5) 小結

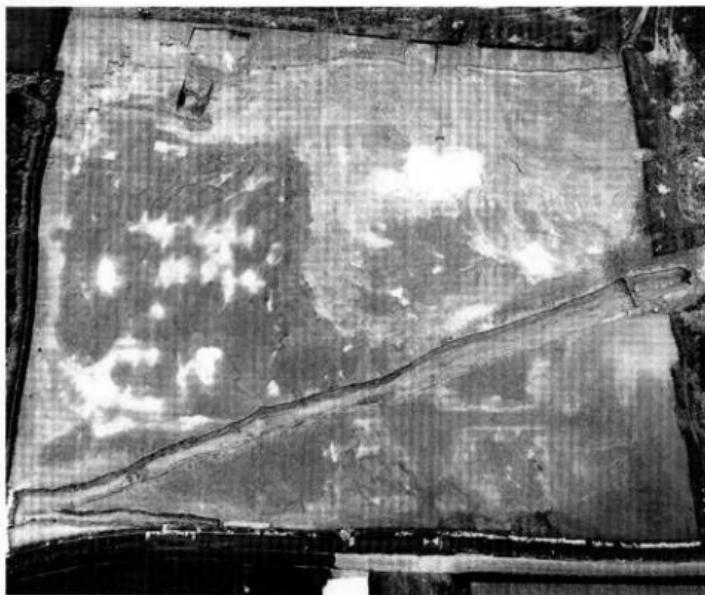
今回の調査では、溝、土壤、落込み状遺構、不明遺構等を検出したが、柱穴の痕跡が認められないため居住空間としての利用がなされていないと思われる。また、S D 10. S D 20 の埋没過程を土層断面図から考察してみたが、掘り直しの回数について今後再検討の余地があると思われる。周辺の調査を含めて検討していきたい。

参考文献

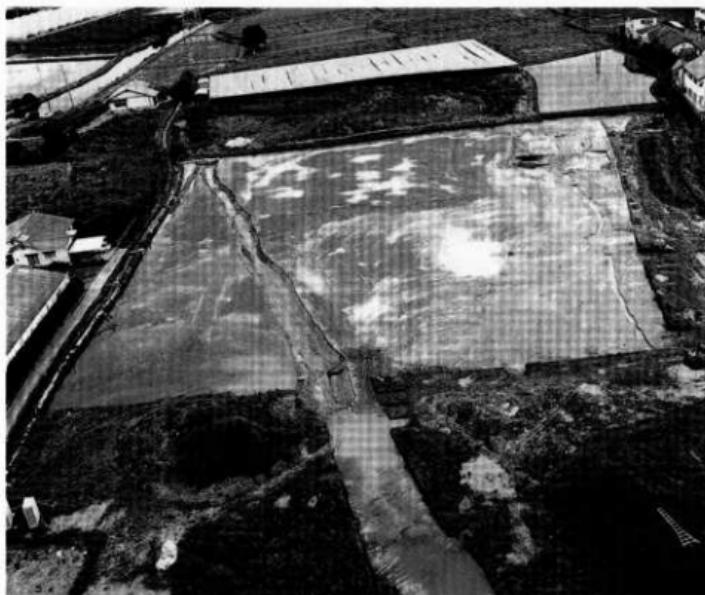
- 森 隆 「北部九州の瓦器生産」[古文化論叢 第30集中] 1993
横田賢次郎・森田 駿 「大宰府出土の輸入中国陶器について」[九州歴史資料館研究論集4] 1978
森田勉 「筑前型瓦器碗の成立過程」[古文化論叢 第14集] 1994
山本信夫 「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器—10世紀～12世紀の資料(1)本文編一」[中近世土器の基礎研究] 1988
山本信夫 「枕原上の土器—古史時代土器群の編年研究によって」[己巳重隆先生古希記念論集] 1992
山村健栄 「大宰府出土の瓦質土器」[中古世土器の基礎研究] 1990
黒木貞矩 「肥前における中世後期在地土器」[中近世土器の基礎研究] 1990
黒木貞矩 「佐賀平野の瓦器碗にみる中世土器生産の一様相」[中古世土器の基礎研究] 1996
松本隆昌 「肥前(佐賀県)における土器からみた貿易陶器—肥前府中の古代末～中世前半の資料から一」[中近世土器の基礎研究] 1996
中島恒次郎 「大宰府における輪形窓の変遷」[中近世土器の基礎的研究] 1992
佐藤浩司 「北部九州における黒色土器の生産と流通」[横山浩一先生退官記念論集「生産と流通の考古学」] 1989
佐賀県教育委員会「本村遺跡」佐賀県文化財調査報告書第402集 1991
筑後市史第1巻 1997

写真図版

図版1



徳久中牟田遺跡
全景（空中写真・真上から：
上が南）



徳久中牟田遺跡
全景（空中写真・西から）



SD10・SD20完掘状況（東から）

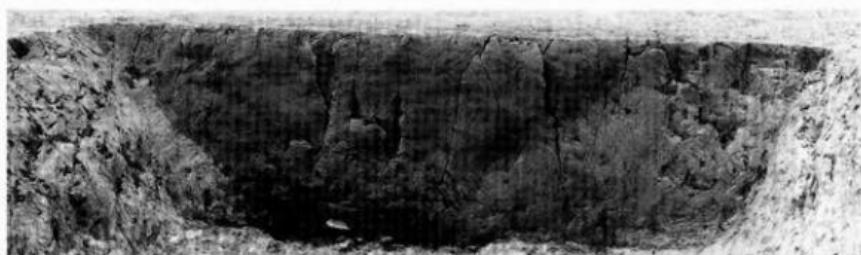


SD10土層観察a-a'の西面（西から）

図版3



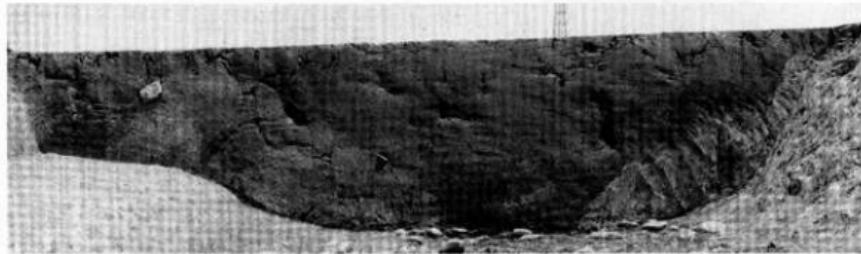
SD10土層観察 $c - c'$ (西から)



SD10土層観察 $d - d'$ の東面 (東から)



SD10土層観察 $d - d'$ (西から)



SD10土層観察 $e - e'$ (西から)

SD10遺物出土情況(東方台)

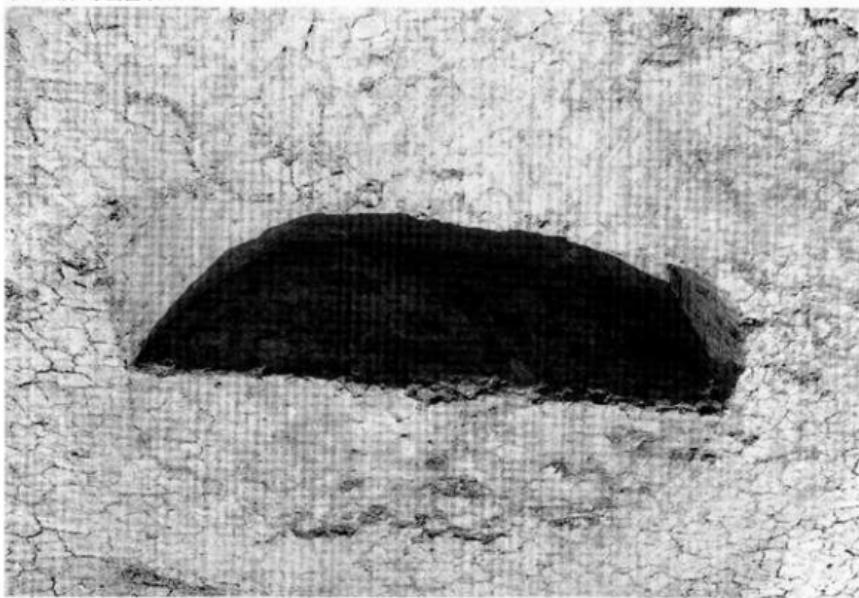


SD10遺物出土情況(北東方台)

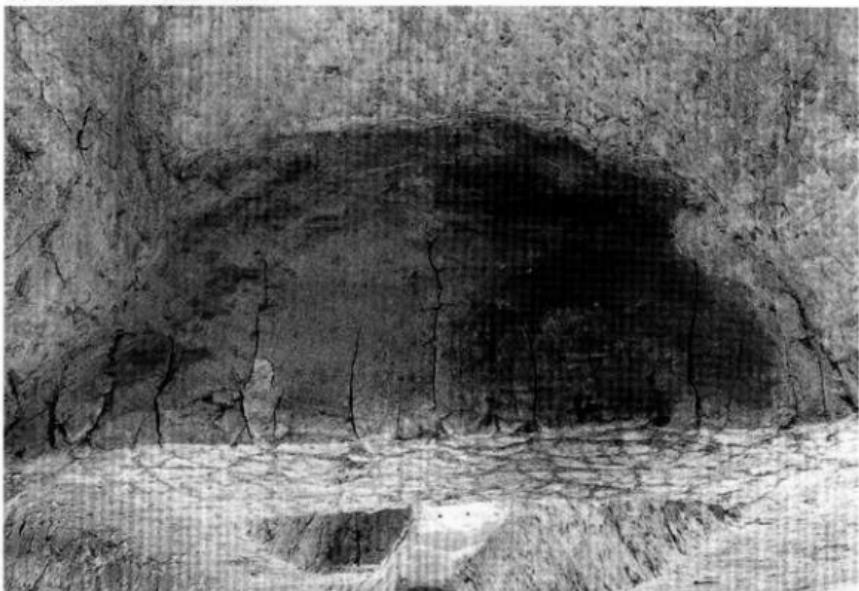


圖版4

SK01土壤剖面图 (北东向)



SD20土壤剖面图 g-g' (東南向)



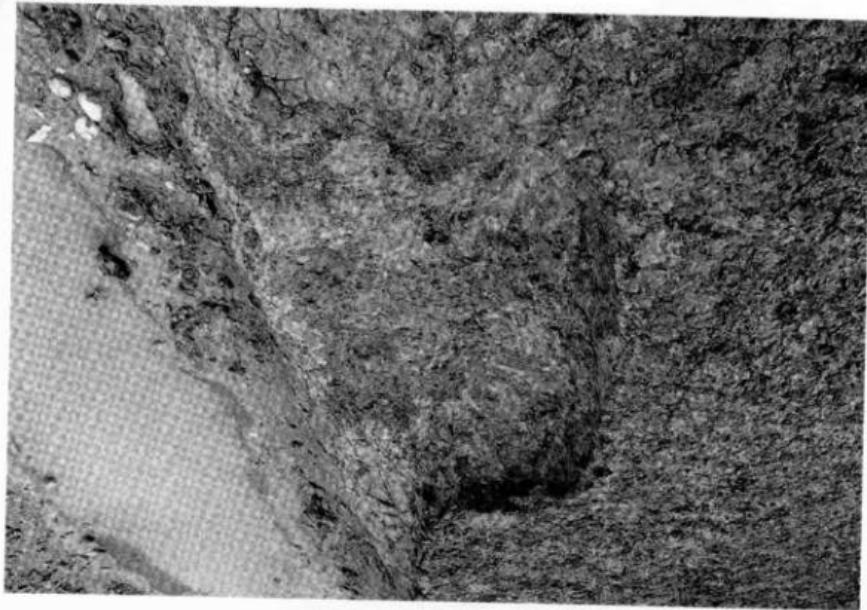


SK01完掘状況（北から）

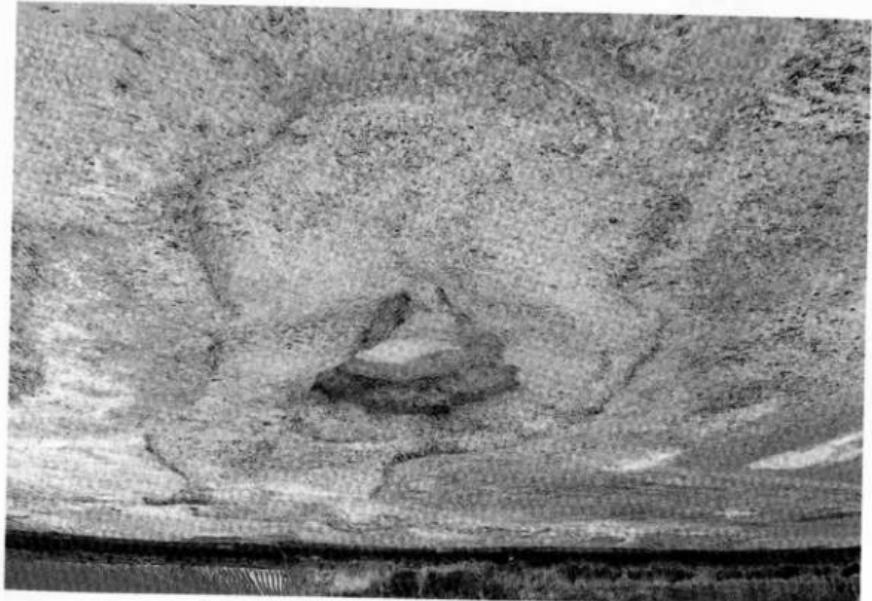


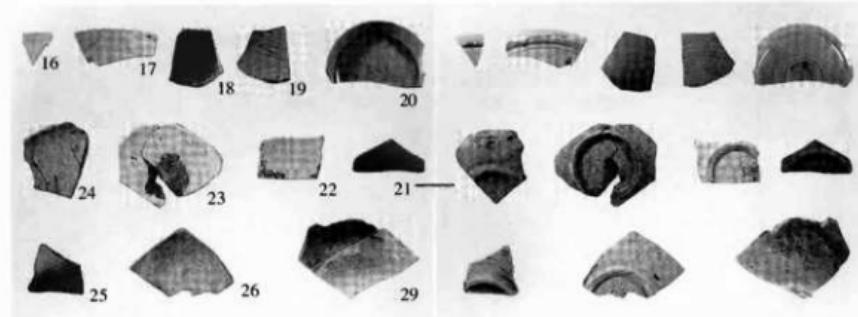
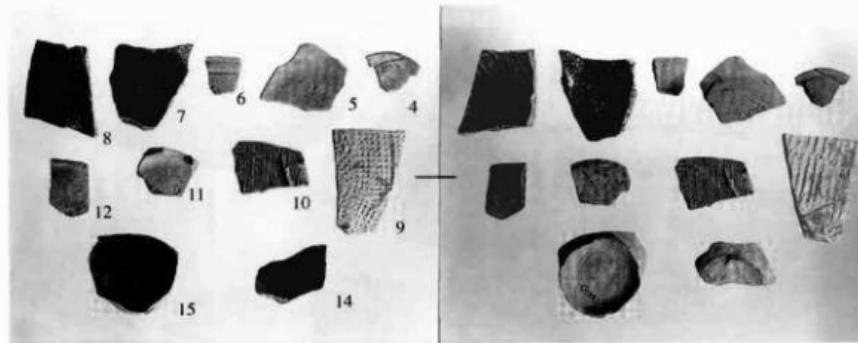
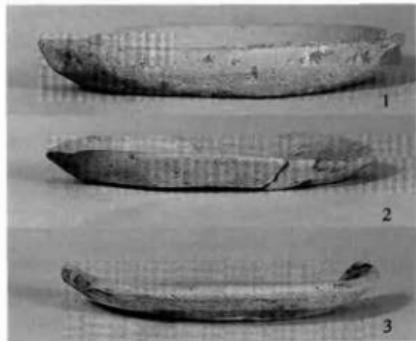
SX15土層観察（北西から）

SK40光顯試驗(四力6)



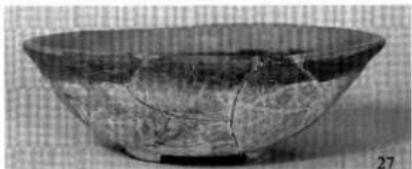
SX15光顯試驗(四力6)



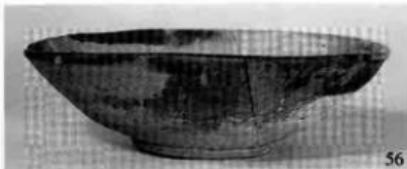


SD10上層出土遺物

図版9



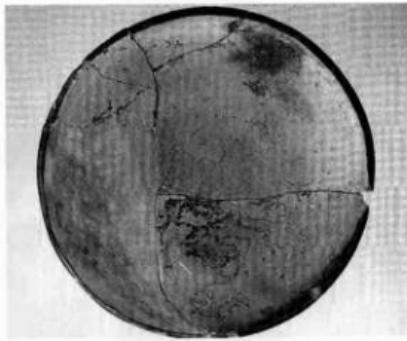
27
SD10上層出土遺物



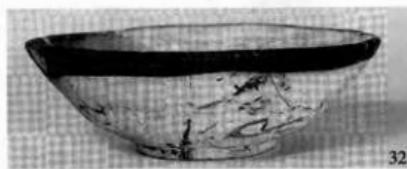
56
SD10上層出土遺物



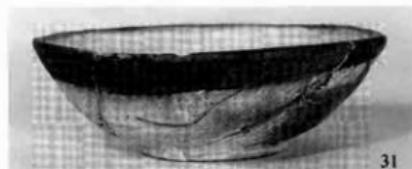
28
SD10上層出土遺物



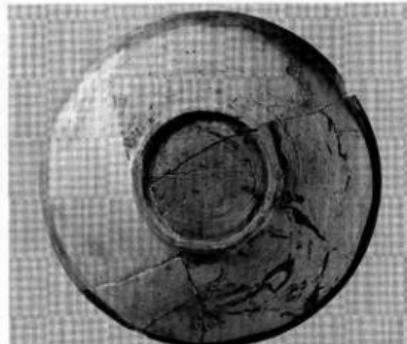
30
SD10上層出土遺物



32
SD10上層出土遺物



31
SD10上層出土遺物



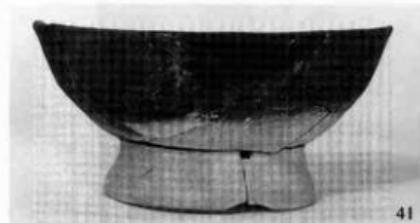
40
SD10上層出土遺物



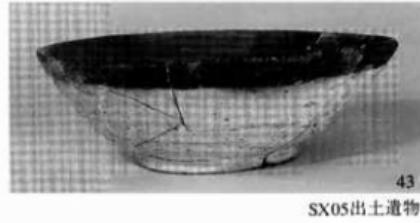
SD10上層東端出土遺物



SD10中層出土遺物



SD20上層出土遺物



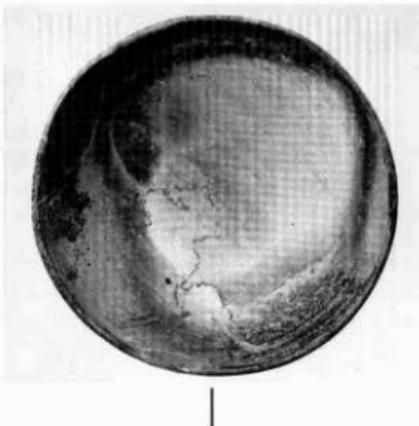
SX05出土遺物



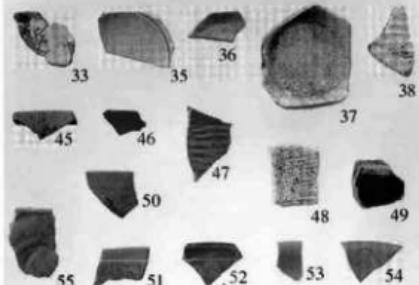
SK35出土遺物



SX05出土遺物



SD10上層東端出土遺物



SD10中層・SD10下層・SX15東端
SX15西端・表探出土遺物

編集後記

作業中、梅雨に入ってしまった結果、現場は何度も冠水しました。このため、水を抜くのに時間がかかり調査が停滞状態、関係者の方々には多大な迷惑をかけてしまいました。

発掘調査地点は、現在サンリープ筑後店として生まれ変わっています。

毎日泥だらけになりながら作業を続けていただいた作業員の方々に、この場をかりて心から感謝致します。



水没状況（西から）

徳久中牟田遺跡

筑後市文化財調査報告書 第19集

平成11年3月

編集発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 瞬報社写真印刷株式会社

〒810-0001

福岡市中央区天神5丁目4番16号